財団法人 麻薬覚せい剤乱用防止センターより引用

薬物データベース

薬物乱用防止の基礎知識

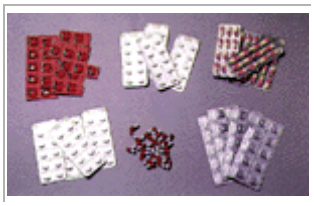
[乱用される薬物] 乱用される危険性のある薬物は"こころ"すなわち精神に影響を与える作用をもっており、中枢神経系を興奮させたり抑制したりして、多幸感、壮快感、酩酊、不安の除去、知覚の変容、幻覚などをもたらす働きがある。使用量によっては、急性中毒症状のために直接死につながる危険性もあるが、特に問題となるのは、これらの薬物のうち連用することにより依存性を有するものである。依存性薬物は依存形成物質、精神作用物質などとも呼ばれ、特に乱用が流行して社会的に問題になる薬物は、乱用薬物といわれる。依存薬物の範疇に入る薬物は百数十種類もあるが、ICD-10(WHO 国際疾病分類)に基づき日本で使用する精神作用物質の区分は次の通りである。

アヘン類;ヘロイン、塩酸モルヒネ
大麻類;マリファナ、ハシッシュ
鎮静剤または催眠剤
コカイン
カフェイン
アンフェタミン<覚せい剤乱用>その他の興奮剤
幻覚剤;LSD、メスカリン、MDMA
揮発性溶剤;トルエン、及び その他の精神作用物質
2C-B(新規制薬物)

覚せい剤

ヘロイン

大麻



覚せい剤（錠剤）	向精神薬	LSD

薬物データベース

向精神薬およびその他の薬物について

[MDMAについて]

MDMA（メチレンジオキシメタンフェタミン Metylenedioxymethamphetamine）は、興奮作用と幻覚作用を併せ持つ錠剤型の合成麻薬で、エクスタシーなどとも俗称されており、最近、検挙人員・押収量が、急増しています。

乱用すると、混乱、憂うつ、睡眠障害、不安等があり何週間も後にさえ、存在します。また、脱水症、高血圧、心臓や肝臓の機能不全が生じます。

大量に摂取すると大変危険で、悪性の高体温による筋肉の著しい障害や腎臓と心臓血管の損傷を起こします。

薬物データベース

覚せい剤について

■薬物別解説／覚せい剤

覚せい剤は、メタンフェタミンの有する覚せい作用から名づけられたものである。

覚せい剤には、メタンフェタミンとアンフェタミンがある。メタンフェタミンは、我が国でエフェドリンから合成されたものであり、エフェドリンは咳止め効果のある生薬の麻黄（マオウ）の成分である。性状は白色、無臭の結晶で水に溶けやすい。1941 年にヒロポンなどの販売名で発売され、第二次世界大戦時には軍需工場の労働者が徹夜作業を行う際にヒロポンを服用したという。戦後、大量の覚せい剤が民間に放出され、虚無的享楽の手段として乱用された。第一次覚せい剤使用期の昭和 29 年には史上最高の 5 万 5 千人が検挙された。

薬物データベース

大麻について

■薬物別解説／大麻

大麻とはクワ科の一年草で中央アジア原産の植物です。古代から繊維用として栽培されてきました。この植物にはTHCという成分が含まれており、葉などをあぶってその煙りを吸うと酩酊感、陶酔感、幻覚作用などがもたらされます。現在では世界のほとんどで麻薬として規制され、所持しているだけでも死刑や無期懲役となる場合もあるほどです。

大麻を乱用すると気管支や喉を痛めるほか、免疫力の低下や白血球の減少などの深刻な症状も報告されています。また「大麻精神病」と呼ばれる独特の妄想や異常行動、思考力低下などを引き起こし普通の社会生活を送れなくなるだけではなく犯罪の原因となる場合もあります。また、乱用を止めてもフラッシュバックという後遺症が長期にわたって残るため軽い気持ちで始めたつもりが一生の問題となってしまうのです。社会問題の元凶ともなる大麻について、正確な知識を身に付けてゆきましょう。

薬物データベース

大麻について

[　大麻とは　]

どんな形のものにせよ、大麻は心身に有害です。通常認められる身体症状の幾つかを挙げてみますと、心拍数を上昇させ、目を充血させ、口や喉の渇きを感じさせ、食欲を増進させるなどです。

大麻（cannabis、カンナビス）を使用しますと短時間の記憶力や理解力が低下したり時間感覚に変調を来したり、車の運転などのように、身体各器官の調整や神経の集中を要求するような仕事を行う能力が低下します。研究結果によりますと、学生が（大

麻で)「ハイな状態」(恍惚状態)になっているときには、知識を記憶できていません。動因(motivation。心理学用語で欲求の満足や目標の達成に向けられる行動を抑制する力の総称)や認識に異常を来たし、新たな知識の吸収を困難にします。大麻も偏執病等の精神病を引き起こすことがあります。

乱用者は再三にわたり、濾過していない大麻の煙を吸い込み、そのうえ出来るかぎり我慢して息を止めておきますので(こうすることで大麻成分をなるべく多く肺から吸収しようとする)、肺などの呼吸器官に障害をもたらします。大麻の煙の中には、発癌性物質が普通のタバコより多く含まれています。長期間乱用していますと精神的な依存ができあがり、同程度の効果を得るためにより多くの大麻を必要とする状態になります。この薬物が彼らの生活の中心を占めるようになるのです。

大麻の煙に直接接触している部位以外の場所にも様々な危険が存在しています。心拍数は 50%も増加し、これが原因となって脳細胞相互の伝達に重要な役割を持つ小さな髪の毛状に長く伸びた脳細胞の細胞膜を傷つけるため、脳障害が発生します。更に有毒成分はその他の脳細胞にも蓄積されます。長期間の乱用では再生不良性の脳障害を生じることがあります。また免疫性も著しく低下します。人格や性格の変化もみられます。重度の乱用者にあっては、偏執病的思考を示し、労働の生産性、学業の成績、運転能力はいづれも低下します。

マリファナは、生殖能力にも障害を生じさせますので、遺伝子の異常や突然変異をもたらします。男性ではテストステロン(性ホルモン)を 44%も低下させます。また女性では生殖細胞に異常を生じます。(大麻の有害成分は)胎盤関門(母胎血液と胎児血液の間に胎盤膜によって形成されている関門)をも通過して胎児にも影響を及ぼしますので、胎児の大麻中毒や流産、死産の原因にもなります。大麻成分のすべてが解明されるまでは、危険性そのものもまだまだ測り知れません。

薬物データベース

大麻について

■大麻の原料

次に示す理由から、今日のマリファナは、10～20年前のマリファナに比較して、一段と危険性を増したものとなっています。第一は、過去、マリファナに関して実施された研究が、この物質は恐らく無害であり、アルコールやタバコに比べても健康に与える危害が少ないであろう、といった印象を人々に与えてしまったこと。第二に一口にマリファナと言っても、10年前のそれに比べて、今日のマリファナは極めて強力なものになっていることです。10年目のマリファナは僅か1%かそれ以下のTHC（原注：delta-9tetorahydrocannabinol、デルタ・ナイン・テトラヒドロカンナビノール）しか含まれていなかったのですが、現在のマリファナでは何と4～7%又はそれ以上もの THC が入っているのです。

マリファナには1,500を上回る物質が含まれていると言われています。この内500以上の物質は既に特定されていますが、大麻以外には、自然界に何処にも存在しないことが判明している物質であるTHCこそ、精神作用に重大な影響を与える元凶であると考えられているのです。

THCは体内の脂肪組織や脳細胞の中に一ヶ月もの間止まることがあります。従って、ある人が仮に週に一本の割合で大麻タバコを吸ったとしますと、それだけでその人は最早常時THCに曝され続けることになる計算です。また、（大麻タバコの煙を）胸の奥まで吸い込んだりしますと肺に障害が発生することも知られています。一週間に5本の大麻タバコを吸うことは、一日16本の普通のタバコを吸うのに等しいとも言われています。大麻のタールはタバコのそれより50%も多く含まれていますので、副鼻腔炎（sinusitis）、気管支炎（bronchitis）、肺気腫（emphysema）などの原因となります。

タイプ	通称	形状	使用法
マリファナ（Marijuawna）	ポット（Pot）、グラース（Grass）、ウィード（Weed。ウィードとは海草のことですが、見かけが似ているところからこう呼ぶことがあります。）、リーファー（Reefer。海軍の少尉候補生のことですがどうして転義が生じたのかは不明です。）、ドウプ（Dope。大麻のみならず、広く乱用薬物を指します。）、メアリー・ジェイン（Mary Jane）シンセミーリャ（Sinsemilla。別名をSinsといい、種なし上質大麻）、アカプルコ・ゴールド（Acapulco Gold）タイ・スティックス（Thai sticks。タイでとれる大麻の花穂部分を大麻樹脂で固め、長さ薬10cmぐらいの細い竹串を軸にして巻き付けたうえ周辺を縫い糸でグルグル巻いて棒状にしたもので、その産地・形からタイ・スティックと呼ばれている。またの名をブッダ・スティックともいいます。	乾燥したパセリの微塵切りの感じで、茎なども混入している。	
テトラヒドロカンナビノール（Tetrahydro-cannabinol）	ティー・エイチ・シー（THC）	ソフトなゼラチンカプセルに入っている。（その物自体は透明液体です。）	経口又は吸煙する。
ハシッシュ（hashish）	ハッシュ（Hash） （日本ではこの名の他に、「チョコ」が一般的。 なお「シット」（shit）とも呼ばれる。）	茶色又は黒い塊（すこし緑っぽいものもあります。）	食べたり吸煙したりする。
ハシッシュ・オイル（Hashish Oil）	ハッシュ・オイル（Hash Oil）	濃厚な抽出物で色は黒を中心に様々。	タバコと混ぜて吸煙する。
大麻とPCP(フェンサイクリディン)の併用	ワック（Whack）、ボート（Boats）、シャーマン（Sharman）	先端が茶色の巻きタバコ、シミの着いたタバコなど。	吸煙する。

（PCP=Phencyclidine。麻酔剤ですが、通常アニマル・トランキライザーと言われ、動物用に使用されていたものです。アメリカの麻薬取締官（DEA）の話では、このクスリの乱用者は、腹に何発かの銃弾を受けながら、なお平気な顔で向かって来る、といったこともある、と話しておりました。恐ろしいクスリです。）

薬物データベース

コカインについて

■薬物別解説／コカイン

コカインはコカという灌木の葉が原料です。原産地は南米で、古代から貨幣と同様に扱われる貴重な植物でした。後にヨーロッパでコカの葉から独自のアルカロイド成分・コカインが分離され、麻酔薬として使われるようになりました。

コカインはごく少量でも生命に危険な薬物です。主に鼻の粘膜から吸いこんで摂取するため鼻が炎症を起こし、肺も侵されます。この麻薬のもっとも特徴的な中毒症状

には、皮膚と筋肉の間に虫がはいまわるような感覚が起こる皮膚寄生虫妄想というものがあります。また、脳への影響も大きく、痴呆状態となり人間として生きることそのものを放棄することになるのです。これらの他にも妊娠中のコカイン摂取が子供に及ぼす影響（コカインベービー）も重要な問題です。

コカインの恐ろしさは、どんな人も決してやめられないことにあります。ゆっくりとした死への道筋をたどらせるコカインについて、改めて見直してゆきましょう。

薬物データベース

コカインについて

[コカインとは]

「一回やっただけで、もののみごとに虜になるクスリ」（"One hit and you are hooked "drug）と言われるのがコカインです。最良の予防策は、この薬物に関して、またこれが人々に与える惨憺たる害悪を与えることについて、正確な情報を与えることにあります。問題の発生に先立って情報を提供すること、それが予防策の中核となります。

また、コカインはどんな量でも使いすぎとなり得ます。理由は、生体の化学物質に対する反応には個人差があり、ある種の物質にどう反応するかは一定していないことによるものです。従って、ある人には安全な量が別の人には致死量であり得る訳です。更に、密売人達は、なるべく薬の量を増やして儲けようと企んでいますから、混ぜ物をしたり、増量剤を加えたりします。ですから実際に何が入っているのか誰も正確には知らされずに使っているのです。実のところ、コカインに起因する死亡事故は、非常識なほどの多量が原因となったものではなく、むしろ、こうしたクスリへの反応で死に至っているのです。

コカインがもたらす多幸感（ユーフォリア。陶酔感）には、当然それなりの代償が要求されるのです。誰も最初から中毒になろうと計画している訳ではありません。むしろ、誰もが自分はクスリの害悪に打ち勝つことができる、と信じているのです。勿論すべての問題が、必ず乱用者のすべての者に襲いかかるというわけではありませんが、少なくとも好ましからざる症状の幾つかを経験せずには済まないことだけは、くれぐれも肝に銘じておかなければなりません。一見、実に楽しくて幸せな感じに見えますが、コカインの極一時的な快楽は、やがて再現のない長く悲しい多くの問題を抱えることに変わって行くのです。

薬物データベース

コカインについて

■コカインの原料

コカインは南米に生育する「コカ」という木の葉から抽出される物質で、通常はふわふわした感じの白色粉末です。化学的にコカインは中枢神経に覚醒作用を及ぼすほか、局所手術用の麻酔として使用されています。人々は何世紀もの間、この薬を使用し、また、乱用もしてきました。

末端の密売における呼び名としては、コーク(coke)、トウート(toot)、ブロウ(blow)、キャンディー(candy)、リーフ(leaf)、シー(C)、ノウズ・キャンディー(nose candy)、フレイク(flake)、ハッピー・ダスト(happy dust)、ホワイト・ガール(white girl)、そしてゴールド・ダスト(gold dust)があります。

タイプ	通称	形状	使用法
コカイン	コーク (Coke) スノウ (Snow) フレイク (Frake) ホワイト (White) ブロウ (Blow) ビッグC (Big C) ノーズ・キャンディー (Nose Candy) スノーバーズ (Snowbirds) レディー (Lady)	白色結晶状物質で、普通は他の物質を混ぜて、又は「割って」ある	鼻腔内吸入 注射 吸煙
クラック又はクラック・コカイン	クラック (Crack) フリーベイス・ロックス (Freebase Rocks) ロック (Rock)	薄茶色又はベージュのペレット状又は塊状結晶で固形石鹸の破片に似たものが小瓶又は透明カプセルに入っている	吸煙

薬物データベース

コカインについて

■コカ葉（COCA LEAF）

南米のボリビアやペルーなど、アンデスの高地に産する耐寒性の樹木、エリスロキシロン・コカ（Erythloxylon coca）と呼ばれる木の葉には、今日コカインとして知られるある種のアルカロイドが含まれています。この樹木は国内消費用に正規に栽培されていますが、それらの一部は不正ルートを通じて流され、コカ・ペイスト（coca paste）の形にされたうえ、塩酸コカインを製造する能力を持った密造所へと運ばれます。

■クラック（CRACK）

「クラック」（CRACK）や「ロック」（ROCK）という名で知られているこの薬は、おそらく今日巷で密売されているクスリの中で、もっとも危険なものの一つであると言えましょう。あらゆる年齢や階層の人々に広く乱用されていると言っても過言ではありません。コカインを精製した形のこのクスリは簡単に入手でき、そのうえ極めて強力です。

クラックは「塩」（エン）の形をしたコカインに、化学的な変化を与えることによって 作られる遊離体の結晶性アルカロイドです。（例えば塩酸コカインからHCLが取れて、コカインの遊離体になることを説明しているのです。）これは膏薬状のものが固まった状態のものですが、通常はこれを砕いて、いくつもの砂礫状の小さな塊となっています。安価で強力ですから、勢い使用者の間で大きな問題を作ってしまいます。

クラックによる「ハイ」（恍惚感）は、吸煙したとき即座に現れます。効果の持続時間は、ほんの3～5分ですから、次々とこの強力なクスリを反復して使用してしまうのです。クラックはコカインと同様危険ですが、その程度は一層激しいものです。

このクスリに対する依存症は極めて高いもので、たとえ一回でも使いますと、忽ち依存ができてしまいます。いてもたってもいられない程の極めて強烈な欲求が生じるのがこの クスリの副作用で、生活の全てを犠牲にしてでもクスリの満足感を味わおうとします。

■フリーベイシング（FREEBASING）

1979年以降、コカインの喫煙用フリーベイシング（遊離体を作る作業）が目を見張る程盛んになってきました。フリーベイシングと称する所以は、巷で密売されているもの

が「塩」（エン）の形をしているため、加工を通じて、これから塩基を取り除いて（つまりフリーにして）活性をもったクスリに作り変えるからです。こうした加工は、溶解したコカインを、エーテルや水酸化ナトリウム、又はベイキング・パウダーなどを混入させることにより、行います。コカインの「塩」（エン）は溶解し、後には純粋なコカインが細粒の形でできあがります。巷で密売しているコカイン約 1 グラムから、遊離体のコカイン約 0.1 グラムができます。

こうした出来上がった細粒は、水又はラム酒を満たしたパイプ［多くの場合ガラス製］に詰めて吸煙します。

火皿の中には数枚の小さな金網が敷き詰められており、コカインがこぼれないようになっています。フリーベイス・コカイン　の蒸気を発生させるために　常に熱を加え続けます。そのためにマッチ、ライター、更にはブタン・トーチ（ガスボンベから炎が吹き出すタイプ）などが使われます。

かくして、コカインの蒸気は吸うことによって直接肺に達します。そして直ちに劇的な「ハイ」な感じ（恍惚感）が訪れるのです。この気分は長くとも 10 分程度ですから持続させるためにはすぐに次の一服をやらなければなりません。使用を重ねるうちに、極端な偏執病に陥り、精神に重大な障害を来します。

フリーベイシングは最早乱用者の生活にとって他の何事にも替えがたい極めて重要な習慣になってしまうのです。またこうした吸煙は、回を重ねる毎に頻繁になりますから、非常に高くつくことにもなります。更に、フリーベイシングに絡むもう一つの危険性は、火事です。エーテルやラム酒にあまり近付けて点火しようとしたことによって火傷を負った乱用者もいるのです。

薬物データベース

ヘロインについて

■薬物別解説／ヘロイン

けしから採取される生あへんにはモルヒネ、コデイン等のアルカロイドを含有する。ヘロインの化学名は塩酸ジアセチルモルヒネであり、塩酸モルヒネを無水酢酸で処理製造される。

1874 年にイギリスの化学者によって、モルヒネから初めて合成された。その後、ドイツの製薬会社が「ヘロイン」という販売名で咳止め薬として発売したものである。密造されるヘロインは、白色、灰白色から褐色まで、粒の細かい粉末から荒い粉末まで様々である。我が国では戦前までは医薬品として使用されていたが昭和 20 年に医療目的の使用が禁止されていた。

薬物データベース

ヘロインについて

[ヘロインとは]

ヘロインは何といっても乱用薬物の頂点に位置する物質で、アメリカでは乱用者に最も好まれている物質です。ヘロインは白色又は茶色い結晶性粉末で無臭、水によく溶ける苦味のある物質です（ヘロインが水に溶ける様子は、すさまじい程、速やかで、水面にヘロインが達したか否かの瞬間に水面を走り回って溶けます）。この物質の色は産地によって異なり、メキシコのものは茶色乃至は灰色、中近東及びアジアでは白色といった具合で、アジアのものは純白であるだけに純粋で、それだけ価格も高くなっています。

ヘロインは化学的加工によりモルヒネから製造される物質で、モルヒネの誘導体ですが、モルヒネの 3 倍も強力ですし、中毒性もモルヒネに比べて非常に高い物質です。密売に供されているヘロインは製造工程に加えて、砂糖、タルカム・パウダー（目に蓄積して失明の原因になることも判明している）（タルカム・パウダーは、滑石と硼酸末の混合物に香料などを混ぜたもので、汗疹や爛れの予防に肌に付けるものであり、もともと体内に入れるものではない。）、エプソム塩、マンナ糖などの緩下剤、粉石鹸、キニーネ、ストリキニーネなどを混ぜ込んだりします。作用は殆どモルヒネと同じですが、より早く効き、且つ、効いている時間は短くなります。身体的な依存性は非常に高く、精神的な依存も存在します。他の如何なる麻薬よりも依存性が早くできあがります。

薬物データベース

ヘロインについて

■ヘロインの原料

ヘロインは、「けし」(我国において法律で栽培が禁止されている「けし」は、1 パパヴェール・ソムニフェルム。2 パパヴェール・セティゲウム、3 パパヴェール・ブラクティアタムの三種類です)の液汁を集めて煮詰めて「あへん」を作り、そのあへんから「モルヒネ」を抽出し、モルヒネを化学的に化合してヘロインが作られます。

ヘロインは吸煙したり経口摂取もできますが、多くの乱用者や中毒者達は注射器(それも手作りの簡単なもの)を使って注射します。少量の水でヘロインを溶かしますが、このとき、作業をし易くするために、にぎる把手の部分を折り曲げたスプーンを使用します。これをマッチやランプの炎にかざして、ヘロインを溶かす訳です。こうして溶かしたヘロインは一度脱脂綿濾してから注射器に吸い取るか、スポイトで吸い上げるかしたのち、既に血管に差し込んである注射器に繋いで、注射する、という方法です。(注射痕は腕から足先までのあらゆる場所や鼻、口の中、臀部や陰部などいたるところにみられます。)ベルトや紐などの細い長いものを使って止血帯をつくり、これで静脈を浮き立たせます。

こうした静脈注射のほかに、皮膚を軽くツンと刺して皮下注射する場合もあります。(静脈)注射は乱用者の間では「メインライニング」(静脈を意味する俗語)と呼ばれ、高い金を出してやっと購入したヘロインを一滴たりとも無駄にせずに済み、而も最初に味わう快感が強力であることなどから、この使用法は彼らに最も好まれています。何年も注射を続けています静脈は破壊され皮膚は通常の注射が不可能なほど硬くなってしまいます。それでも彼らはハイな気分を求め、最後のあがきとして、皮膚を剃刀の刃で切り裂いて、まだ注射できそうな柔らかい静脈を模索します。

	通称	形状	使用法
ヘロイン	スマック(Smack)、ホース(Horse)。	白色粉末	注射
	ブラウン・シュガー(Brown Sugar)。	茶色	鼻から吸引
	ジャンク(Junk)、マッド(Mudd)。	タール状	
	ビッグ・エイチ(Big H)、 ブラック・タール(Black Tar)。	(同上)	吸煙

薬物データベース

向精神薬およびその他の薬物について

■薬物解説／向精神薬及びその他の薬物

向精神薬とは睡眠薬や鎮静剤などの総称で、バルビツール酸という成分を含む医薬品をさしています。もともとは不眠やいらいらなどをなくすための薬ですが、これらも乱用すれば麻薬となります。

向精神薬を乱用すると酩酊感が得られます。からだの緊張をときほぐし、リラックスした気分をもたらすのです。しかし乱用が重なると慢性的な倦怠感があらわれ、筋肉の運動機能も低下してまともに歩けなくなってゆきます。感情は不安定で妄想も現れ、突然凶暴になったりもします。

これらの向精神薬と同様に、ある化学物質だけで作られた薬物がほかにもあります。例えば LSD の名で知られる幻覚剤もそのひとつです。ここでは本来、不安をなくすために開発されたはずの薬品が、どのように乱用され、人の精神を異常にさせてゆくかをみてゆきましょう。

薬物データベース

向精神薬およびその他の薬物について

[　向精神薬の症状　]

向精神薬にはさまざまな種類がありますが、ここでは鎮静剤、催眠剤、精神安定剤、抗不安剤について説明してゆきましょう。

1）鎮静剤

鎮静剤は本来、気持ちを安らげ、筋肉の緊張をほぐす薬効がありますが、医師の処方に従わずに乱用すると、一時的な快い気分の後に、舌がもつれる、足元がふらつく、知覚に異常を生じるなどの症状が現れてきます。また多量に摂取した場合には、呼吸器の機能を低下させ、昏睡から死に至ることもあります。

鎮静剤には依存性があり、一定期間使用し続けると耐性を生じます。薬の量が増えた後に、突然使用をやめると、不安、不眠、痙攣などの禁断症状を引き起こします。

また、妊娠中の人が鎮静剤を乱用すると、生まれた子供にも影響が起こり、生後しばらく後に禁断症状と同様の症状が現れることがあります。また、先天的な障害を持つ子供、行動に異常のみられる子供が生まれることも報告されています。

2）催眠薬

催眠薬は、その名の通り、不眠症などの症状を持つ人に正常な眠りを与えるための薬です。この薬は心に落ち着きをもたらし、眠気を誘います。しかし乱用の場合には眠りにはつかず、ふだんのままの行動をおこないます。すると、薬が効いている間の出来事はほとんど記憶に残らず、夢の中のような状態となりますが、こういった作用が脳などにどのような影響を与えるのかは定かではなく、たいへんな危険を心身にもたらすのです。そのうえ過度に服用すると、脳の呼吸中枢を破壊して死に至ることもある、といわれています。

催眠薬の恐ろしさは、耐性にあります。ごく短期間に耐性が形成され、摂取量が急激に増えるので、いつのまにか致死量に達するほどの量を摂取してしまうことがあるのです。また、アルコールと共に摂取すると、強烈な抑制作用が起こり、昏睡や死亡の危険性もあります。

また、慢性的な乱用の副作用としては、正常な睡眠がとれない、めまい、ふらつき、精子の減少、奇形児の出産などの可能性があるとされています。

3）精神安定剤

この薬は主に分裂症などの精神病の治療に用いられます。正常な精神活動が認められない時に用いるものを、ごく普通の人が乱用すると、恐ろしい作用が現れてきます。

たとえば、一瞬にして頭の中が真っ白になって何も考えることができなくなるようなショック状態、言語不能、文字が書けない、などの極端な症状が現れることも報告されています。また、薬によっては、脳内のドーパミンという物質の分泌を止めてしまうので、全身の筋肉がまともに動かなくなってしまうこともあります。また、行動異常や強迫観念などが起こることもあるようです。

また抗うつ剤として知られているような薬は、一時的に「超人的な気分」をもたらしますが、副作用もすさまじく、不眠、食欲不振、興奮、イライラ、情緒不安、性器萎縮などが起こります。こういった副作用によって精神的依存が始まり、繰り返し摂取するよ

うになってゆきますが、耐性も強く、あっという間に最初の量では効果が得られなくなり、薬物への依存が始まります。

4）抗不安剤

トランキライザーの名で知られる抗不安剤は、一部のものをのぞいて、ほとんどが多大な副作用を持つ成分を含んでいます。乱用による摂取では、翌日にだるさや吐き気、手足のしびれ、眠気、脱力、疲労感、意識がもうろうとするなどの症状が現れてきます。

これらの薬は脅迫的な不安感にかられた時に服用するもので、一時的に安らかさや、気分が冴え渡るような感覚を与えてくれますが、あくまでも医師の処方が必要な薬です。正常な精神活動の人にとっては、その後の副作用により精神的依存を招く恐れのある危険な薬物となることを覚えておきましょう。

薬物データベース

向精神薬およびその他の薬物について

[MDMAについて]

MDMA（メチレンジオキシメタンフェタミン Metylenedioxymethamphetamine）は、興奮作用と幻覚作用を併せ持つ錠剤型の合成麻薬で、エクスタシーなどとも俗称されており、最近、検挙人員・押収量が、急増しています。

乱用すると、混乱、憂うつ、睡眠障害、不安等があり何週間も後にさえ、存在します。また、脱水症、高血圧、心臓や肝臓の機能不全が生じます。

大量に摂取すると大変危険で、悪性の高体温による筋肉の著しい障害や腎臓と心臓血管の損傷を起こします。

薬物データベース

向精神薬およびその他の薬物について

[鎮痛剤について]

鎮痛剤の作用は少量のものならば気持ちを和らげ、筋肉をほぐしてくれますが、いくらか多めになりますと、舌がもつれたり、足元がふらついたり、知覚に異常を生じたり

します。非常に多量を摂取したときには、呼吸器の機能を低下させ、昏睡から遂には死に至ることがあります。鎮痛剤とアルコールとの併用はこの薬物の作用を相乗的に高めますので、それだけ危険性も大きくなります。

鎮痛剤は身体的にも精神的にも依存を生じます。一定期間使用しておりますと耐性を生じますので、いきおい、クスリの量が増えてゆきます。多量の鎮痛剤を常に使用していた人が、それを急に止めますと、不安、不眠、痙攣、さらには死に至るなどの禁断症状が生じます。母親が妊娠中に鎮痛剤を使用しておりますと、生まれた子供にも

タイプ	通称	形状	使用法
バルビツレート Barbiturates	ダウナーズ（downers）、バーズ（Ｂａｒ）、ブルーデヴィルズ（Blue Devils）、レッド・デヴィルズ（Red Devils）、イエロー・ジャケッツ（Yellow Jackets）、イエロウズ（Yellows）、ネンブタール（Nembutal）、セコンール（Seconal）、アミタル（Amytal）、テュイナル（Tuinal）	赤、青、黄、ピンク、その他のカプセル剤。	
メタカロン（メサコロン） Methaqualone	クオルーズ（Quaaludes）、ルーズ（Ludes）、ソウパーズ（Sopers）、マンドラックス（Mandrex）	錠剤	経口
トランキライザーズ Tranquilizers	ヴァリウム（valium）、リブリウム（Liburiumu）、イクオニル（Equanil）、セラックス（Seraz）、トランジン（Tranzene）	錠剤または カプセル	

薬物データベース

向精神薬およびその他の薬物について

[　バルビツレートの詳細　]

■俗称　　アミーズ（Amies）、バーブズ（barbs）、ブロックバスターズ（blockbusters）、ブルーバーズ（Bluebirds）、ブルー・デヴィルズ（blue devils）、ブルー・ヘヴンズ（blue heavens）、ブルース（Blues）、キャンディー（candy）、クリスマス・ツリーズ（Cristmas trees）、カレッジ・ピルズ（Courage pills）、ダブル・トラブル（double troble）、ダウナーズ（downers）、ダウンズ（downs）、グスター・ピルズ（gangstar pills）、ジー・ビー（G.B.次のグーフボールの頭文字）、グーフボールズ（goofballs）、グーファーズ（goofers）、ゴリラ・ピルズ（gorilla pills）、グリーン・ドラゴンズ（green dragons）、イーディオット・ピルズ（idiiot pills イーディオットとは「バカ」のこと）、キング・コング・ピルズ（king-kong

pills）、マシュマロレッズ（Marshmallowsreds）、メキシカン・レッズ（Mexican reds）、ネビー（nebbie）、ネミーズ（nemmies）、ネンビー（nembie）、ニンビー（nimny）、ピーナッツ（peanuts）、フェニーズ（phennies）、ピンク・レイディーズ（pink ladeis）、ピンク（pink）、パープル・ハーツ（purple hearts）、レインボウズ（raimbows）、レッズ（reds）、セッシー（seccy）、セギーズ（seggies）、スリーパーズ（sleepers）、スリーピング・ピルズ（sleeping pills）、スタンブラーズ（stumblers。クスリで脚をとられる）、トゥーティーズ（tooties、toot とは drinking spree（宴会）などで、フラフラになることを意味する俗語）、イエロウ・ジャケッツ（yellow jackets）、イエロウズ（yellows）

■一般名及び臨床医学上の名称

アモバルビタール（amobarbital）、クローラル・ハイドレート（chloral hydrate）、クロールジアゼポキサイド（chlordiazepoxide）、ダイアゼパム（ジアゼパム。diazepam）、フルラゼパム（flurazepam）、グルテチミド（glutethimide）、塩酸メサコロン（メタカロン。methaqualone HCL）、メプロバメート（meplrobamate）、オキサゼパム（oxazapam）、フェノバルビタール（phenobarbital）、ペントバルビタール（pentobarbital）、セコバルビタール（secobarbital）、（以下は臨床医学的名称。いずれも商品名）アミタル（amytal）、ブチソール（Butisol）、デプロール（Deprol）、イクオニル（Equanil）、ゲモニル（Gemonil）、リブリウム（Librium）、メドミン（Medomin）、ネンブタール（Nembutal）、ノクテック（Noctec）、プラシディル（Placidyl）、クオルード（Quaalude）、セコナル（Seconal）、チゥイナル（Tuinal）、ヴァリウム（Valium）

■バルビツレートの 3 タイプ

バルビツレートは、バービトゥリック・アシッド（バルビツレール酸）を含有し、中枢神経（CNS）を抑制する鎮痛・睡眠薬です。種類は長時間持続タイプ、中時間持続タイプ、それに極短時間タイプの三種類があります。　短時間内での作用は、バルビツレートと近い関係にある中枢神経抑制剤であるアルコールとは作用が類似しています。不安や緊張を解きほぐして穏やかなリラックスした状態が作られます。そうした感情は次第に薄れて、酩酊感の中に消失してゆき、一切のこだわりから解放されます。使用者は発音も不明瞭となり、自ら作り上げた虚構の世界で筋肉は恰もゴムのように感じられて安定しません。外部からの反応は、まるで幽霊（ゾンビ）のように極めて緩慢になります。こうした状態で睡眠状態にはいると、やがて目覚めたときには二日酔いの状態になります。

長時間、常に睡眠薬を使用していると、慢性症状が現れます。つまり、いつも気怠くウトウトした状態、記憶や注意力を集中していられる幅が短くなり、意識性も筋肉の機

能も低下します。感情は不安定となり、分別を欠くようになり、吐き気を催し、不安やイライラが昂じ、不随意な目の動きを示し、ヨロヨロした足取りとなり、発音は不明瞭、そして手足は震えがおさまりません。偏執狂的妄想や周辺への反抗的姿勢が益々高まるその先は、睡眠薬独自の症状、つまり、「凶暴性」が待ち受けているのです。

常習的に使用していきますと耐性が生じます。同じ効きめを得るために更に多くのクスリの量を必要とする状態が続き、次第に肉体的にも精神的にも依存性が出来あがってゆくのです。耐性が高まってゆきますと、致死量は変わらないのですが、使用量が随時増加してゆくため、結果として常習的使用者の使用量が死亡事故を招くことになります。一般的に致死量は、正規の処方量の 10 倍の量であると言われています。

一種類だけでも中毒性の高いものでありますが、これが他の鎮痛剤と併用されたとき、その危険性は何倍にも膨らみます。アルコール、麻薬類、各種トランキライザー、非バルビツレート系鎮痛催眠剤等との併用は、過量摂取（オーヴァードース）事故の可能性を非常に高めることになります。こうした物質の相乗作用が、中枢神経の働きを抑制し、心臓や呼吸器の機能を著しく低下させ、そして中止させてしまう恐れさえあります。就中、「アルコールと鎮痛薬との併用は致命的となること」をしっかりと認識する必要があります。アルコールが睡眠薬による抑制作用を強化し増幅する潜在的な力を持っているからです。こうした併用がもたらす死亡はアメリカでは年間 3,000 件を上回っており、うち 42%は自殺で、残りは過量摂取による死亡事故か、他の薬物との複合的使用による死亡事故となっております。一番危険なことは、鎮痛剤の効果で前に服用した薬の量もろくに思い出せない状態になり、知らず知らずのうちに、致死量を越えて使用してしまい、死に至ることがあるのです。

注意；過量摂取（オーヴァードース）事故は、病院において然るべき治療を施す必要がありますが、緊急時、救急隊員の到着までの間は、患者を絶対に眠らさないようにしてください。また、コーヒーを与えるのも禁物です。何故なら、消化器官にとどまっている睡眠薬が消化管からの分散吸収を促進してしまう働きがあるからです。また、アンフェタミン類（覚せい剤）を与えるのも危険です。こうした組合わせが、ときには死を招くからです。

[　クオルード／マンドレックスの詳細　]

■俗称

ルード（Lude）、クオイ（Quay）、クォード（Quad）、ソウプス（Soaps）、ソウパー（Soper）、ナナ・イチ・ヨン（714's）、マンドレックス（Mandrex）

鎮痛・催眠剤として作られている「クオルード」は、医師の指示通りに使用している限り安全かつ有効な薬です。正規に製造されたこの薬が、あまりにも多量に不正ルートに流出しているため、アメリカの食品医薬品局（FDA）と麻薬取締局（DEA）とは、製造割り当て量を漸次削減させているほどです。そして「メタカロン」（Methaqualone）（クオルード。メタカロン又はメサコロンは商品名で、クオルードと同じです。）の製造元では、遂に 1984 年にこの薬を特別の法規のもとに医療用として認めてはいますが、乱用の危険性を大きいクスリでもあります。

現場で最もよく見かけるメタカロンは「マンドレックス」（Mandrex）（商品名）です。もともとメキシコ性のクオルードであるこのクスリには一定した使用量もないため、使用者にとっては非常に危険です。製造元は作ることには懸命ですが、使用量は気にしていない、といったところでしょうか。通常は錠剤かカプセルの「マンドレックス」ですが、ときとして、溶かして直接注射されることもあります。

■作用

本来メタカロンは、鎮痛・催眠剤として処方される薬ですから、その作用は感情を鎮め、眠気を誘い、多幸感をもたらすもの（これを薬物乱用者の符丁では「ルーディング・アウト」と言います。「ルーディング・アウト」″luding out″とは、気の抜けたポーっとした状態のこと）です。過量の使用では、幻覚や不安などが現れるほか、非常に警戒しているような様相を呈したり、手足の痺れや耳鳴りを生じたり、自分が不滅であるという感覚が生じたりします。多量に使用しますと、震えを生じたり、睡眠のパターンが極端に変化を見せたりします。

■その他の危険性

多くの乱用者が、過量摂取（オーヴァードース）によって自殺を図っています。心臓や呼吸器のショックなどにより死に至ることもあります。中毒による禁断症状では、頭痛、食欲の減退、悪心、寝付きの悪さ、幻覚、過度の緊張などが見られます。痙攣発作も生じることがあります。メタカロンがアルコールや他の薬物と併用されたとき、その反応は更に大きな危害をもたらす恐れを生じます。

薬物データベース

向精神薬およびその他の薬物について

[　幻覚剤について　]

フェンサイクリディン（フェンシクリジン、PCP、phencycliden）は、本能や認識を絶えず制御する役割を持っている脳の新しい皮質（ネオコルテックス）の機能を阻害します。この薬物は痛みを感知する神経の受容体を遮断してしまいますから PCP に纏わる事故では、大抵自らを傷付ける形をとります。PCP の作用は色々ありますが、乱用者の多くは、隔絶された感じや疎外感を覚えるといいます。時間や身のこなしが、緩慢になります。筋肉のバランスも崩れ感覚は鈍麻します。思うように話をすることも出来ず、話始めても支離滅裂になります。

PCP の常用者では、記憶力の低下と言語障害を訴えます。長時間使用しておりますとこうした作用のいくつかは数カ月から一年位続きます。不安定な感情・・・抑鬱、不安、暴力的行為など・・・も見られます。常習的乱用者では最終的に偏執病様の症状、暴力的行動などを示すとともに本人は幻覚におそわれます。多量を乱用した場合には痙攣、昏睡、心臓発作、窒息、脳溢血などをきたします。

リゼルギン酸（LSD、Lysergic acid）、メスカリン（Mescaline）、サイロシビン（Psilocybin）はいずれも幻覚や妄想を生じます。身体的には瞳孔の散大、体温の上昇、心拍数の増加、血圧の上昇、食欲の減退、不眠、体の震えなどが見られます。感情や知覚は極端に変化します。また、LSD やメスカリン、それにサイロシビンは精神的な苦痛を伴う反応を示すのは珍しくありません。乱用者は恐慌状態（パニック）に陥ったり、猜疑心に支配されたり、不安や焦燥に付きまとわれて自制を失います。例え使用を中止した後でも、後発性症状、つまり再燃現象（フラッシュバック）が発生することがあります。

■幻覚剤の概要

幻覚をもたらす薬物（hallucinogenic drugs）は、それが天然の物質であると合成された物質であるを問わず、外界に対する認識を歪んだものにしてしまいます。大抵の場合幸せな気分に、また時として極めて憂鬱な気分にかえてしまうことでも明らかなとおり、中枢神経に働いて興奮状態を作り出します。幻覚剤の影響下では、瞳孔は散大し、体温及び血圧は上昇し、方向や距離、それに時間などの感覚も狂ってしまいます。使用した人は、音が「見える」とか色が「聞こえる」などと表現します。多量を用いますと、

幻覚や妄想などを生じます。時折、自殺を図るなど極めて深刻な憂鬱状態や離人現象（自分が自分であるという感覚を喪失してしまうことで、自分がしていることを離れた所から自分自身で観察しているといった奇妙で不合理な現象）さえ惹起することがあります。従って、幻覚状態にある人については、厳重な監視下に置いたうえ、自分や他人を傷つけたりすることを防ぐため、出来るだけ興奮させないように注意することが肝要です。一般的に、幻覚剤が体から完全に消えるまでは、激しい不安、焦燥、不眠などの症状が残ります。

幻覚が体から完全に消失した遥か後でも、乱用者は突如として、色彩の感じ方に異変を生じたり、静止した物体が動いて見えたり、ある物体を他の物体と誤認したりするようなサイケデリック（催幻覚的、又は精神病者的）な状態の再発・・・即ちフラッシュバック（再燃現象）・・・を断片的に経験することがあります。反復して使用しますと耐性が生じ、より一層の多量使用に傾いてゆきます。幻覚剤を断薬した後にも身体的依存が確認されたという証拠はありませんが、反復使用を続けますと、使用している幻覚剤の種類や使用量や個人差等にもよりますが、精神的な依存を生じる傾向が見られます。幻覚剤は使用に先立って、その作用を予測することは出来ない性格のものである、ということを肝に命ずるべきでしょう。

幻覚剤が、精神的な反応をどのように変化させるかは、性格に解明されている訳ではありません。可能性としては、非常に多くのことが考えられます。いずれにせよ、幻覚剤が脳細胞相互のインパルス（刺激）の伝達を阻害する作用を持っていることについては、殆ど間違いないでしょう。こうした作用は脳細胞と脳細胞の間に位置するシナプス（脳神経接合部）において、又は個々の脳細胞内部の働きを変えてしまうことによって、生じているのかもしれません。

幻覚をもたらす薬は、

（1）細胞内部におけるエネルギーの発生を阻止し、それによって刺激の伝達をも阻害してしまうか、または、
（2）血液脳関門（blood-brain barrier）の透過性を薬が増大させてしまうため、本来なら関門で濾過されるはずの血液成分まで、そのまま通過させ、脳内に侵入させてしまう。

などによって、脳の神経細胞に影響を及ぼしているのかも知れません。こうした血液成分の要素には、ヒトの体内で自然に発生し、神経の働きに影響を与える性質を持った幾つかの化学物質であって、濃度が高い場合には幻覚症状を来すものも、その要素として含まれています。

タイプ	通称	形状	使用法
フェンサイクリディン（phencyclidine）	PCP、エンジェル・ダスト（Angel dust）、ラブボート（Loveboat）、ラブリー（Lovely）、ホッグ（Hog）。	液体、透明、カプセル、白色結晶性粉末、ピル。	経口、注射、パセリ、タバコ、大麻に混ぜて吸煙。
リゼルギン酸（Lysergic Acid）	LSD、アシッド（Acid）、グリーン・ドラゴン（Green Dragon）、レッド・ドラゴン（Red Dragon）、ホワイト・ライトニング（White Lightning、白い稲妻）、碧空（Blue Heaven）、シュガー・キューブ（Sugar Cube、角砂糖）、マイクロドット（Microdot）。	明るい色の錠剤、吸い取り紙のような紙に吸着させたもの、四角いゼラチン片に含ませたもの、透明な液体。	経口、染み込んだ紙を舐めて使用する、ゼラチンや液体の場合には点眼する。
メスカリン（Mescaline）とペヨーテ（Peyote）	メスク（Mesc）、ボタンズ（Buttons）、カクタス（Cactus）。	固い茶色の円盤状、錠剤、カプセル。	円盤形は咀嚼、嚥下、吸煙なお経口もある。

薬物データベース

向精神薬およびその他の薬物について

[LSD の詳細]

■通称

アシッド（Acid）、バレルズ（barrels）、ビースト（beast）、ビッグ・ディー（big D）、ブロッター（blotter）、ブルー・アシッド（blue acid）、ブルー・チーア（blue cheer）、ブルー・ヘヴン（blue heaven）、ブルー・ミスト（blue mist）、ブラウン・ドッツ（brown dotts）、カリフォルニア・サンシャイン（California sunshine）、チェリー・トップ（cherru top）、チョコレート・チップス（chocolate chips）、クリアライト（clearlight）、コフィー（coffee）、コンタクト・レンズ（contact lens）、キューブズ（cubes）、カップケイクス（capcakes）、ドウムズ（domes）、ドッツ（dotts）、50 フラッツ（50 flats）、ヘイズ（haze）、ヘヴンリー・ブルー（heavenly blue）、インスタント・ゼン（禅）（instant zen）、ルーシー・インザスカイ・ウィズ・ダイアモンズ（お気付きでしょうか、これは実は一種の暗号めいた名前で、各単語の頭文字を連ねてみてください。ルーシーの L、スカイの S、ダイアモンズの D。）、メロウ・イエロウズ（mellow yellows）、マイクロドッツ（micro-dotts）、（ドットは「点」、文字通りマイクロ（ミクロ）の点で、直径 2mm 位の極めて小さな錠剤に極少量の LSD を吸着させたものです。）、オレンジ・マッシュルームズ（orange mashrooms）、オレンジ・サンシャイン（orange sunshine）、オレンジ・ウェッジズ（orange wedges）、オズリー（Owsley、密造品なのに高品質の印と称して密造所（者）の名前を刻印したもので、現在では殆ど見られません。1970 年代によく聞いた名前です。）、ペイパー・アシッド（paper acid、日本で最も頻繁に見られるのはこれで、「ブロッター・アシッド」[blotter acid]と言われるもの

の一種です。吸い取り紙のような紙にLSDをスポットしたものです。なお紙にはいろいろなものが印刷されています。）、パーリー・ゲイツ（pearly gates）、パープル・ヘイズ（purple haze）、パープル・マイクロドット（purple microdot）、ロイヤル・ブルー（royal blue）、ストロベリー・フィールズ（strawberry fields）、シュガー（sugar）、シュガーランプ（sugarlump、これら二つは、角砂糖で、これにLSDを染み込ませて使うところからきています。）、サンシャイン（sunshine）、ザ・チーフ（the chief）、ザ・ホーク（the hawk）、トゥエンティー・ファイヴ（25）、ウェディング・ベルズ・アシッド（wedding bells acid）、ウェッジズ（wedges）、ウエジーズ（wedgies）、ホワイト・ライトニング（white lightning）、ウインドウペイン（windowpane、透明又は、半透明のゼラチンにLSDを染み込ませたものです。ゼラチンの形がウインドウペイン（窓枠）に似ていることから、こう呼ばれています。）イエロウズ（yellows）、禅（zen）。

■1960年代になって不正市場に出回り始めたLSDは、無臭、無色、無味で極めて微量で効果があり、判明している乱用薬物中では、最も強力なものです。純粋な形態では透明な結晶ですが、液体の形で製造することも可能です。これを、たった一滴、紙や角砂糖やチューインガムをはじめ、キャンディー、クラッカー、切手等々、凡そ何にでも垂らして使うことができます。幻覚剤LSDは、時として錠剤やカプセルなどの形状で密造されることもあります。僅か1オンスのLSDで30万回分を製造することができます。そして28万分の1ccの分量で、幻覚を引き起こします。サイロシビンに比較して5,000倍も強力なLSDは、概ねグラム単位で計算されます。100マイクログラム（マイクログラムは100万分の1グラムです）もあれば、たちまち幻覚の世界へ「ブットンデ行って」しまいます。末端乱用者の使用量は普通50～400マイクログラムで、この分量があれば、大抵8～10時間は幻覚の世界をさまよっています。僅かに一回分、しかもこの分量だけで、問題を作ってしまう訳です。他の多くの乱用薬物と異なり、過量な使用（オーヴァードース）はあまりみられません。

（LSD は、麦角菌や朝顔の種子の中から見つかった一種のアルカロイドであるリゼルギン酸の誘導体で、半ば合成により作られます。）

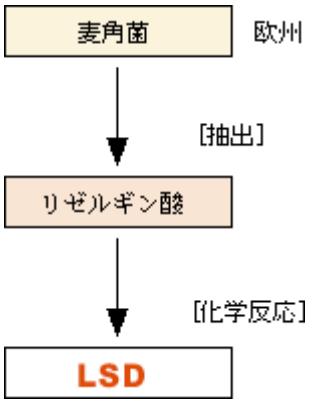
LSDの最初の作用は、心身的なものです。摂取して凡そ1時間もした頃の最初の反応は、漠然とした不安感や悪心で、その後に瀕脈、散瞳、顔面の紅潮、体温・血圧・心拍数の上昇、食欲減退、気分の高揚、不眠などの他、口の中に金属的な味を感じます。こうした症状を呈している「トリッパー」（幻覚の世界の彷徨人）が、一体その後どうなるかは、その人が如何なる暗示を受け易い性質を持っているか、どんなことを期待しているか、といったことと深く関わってきます。

LSD の使用経験に関する「フラッシュバック」 または症状の再燃現象と言われるものは、最初の摂取の後、数日で発生することもあれば、数カ月或いは数年を要することもあります。薬のこうした作用は、精神的なストレスや抗ヒスタミン剤の使用、更には、乱用者の最初の経験に関する刺激回想（stimuli reminiscent）・・・音楽や甚だしい場合はネオンサインの光であったりしますが・・・など付随意的なものが引き金となって顕れるのです。「フラッシュバック」が如何にして生じるか正確なところは誰にも判っていませんが、どうも化学的というより精神的な性格のものによって引き起こされているようです。

この薬は消化されやすい錠剤、カプセル、角砂糖、マイクロドット、ブロッター・ペーパー（吸い取り紙）、四角いゼラチンなどに簡単に形を変えられるほか、切手、チューインガム、固い砂糖菓子、ソーダ・クラッカーなどに吸着させることもできます。

■ブロッター・アシッド（blotter acid）　ここ数年 LSD は連続マンガのキャラクターなどを紙に転写したものが出回っています。こうした物はいずれも子供たちにもお馴染みのウォルト・ディズニーの作品に登場するキャラクター・・・例えば、「グーフィー」（goofy。犬をモデルにしたもの）や「ドナルド・ダック」など・・・が印刷されており、肌に付けると LSD が吸着される仕組みになっているのです。（日本の乱用者は舐めて使用しているようです。）

■ピラミッド・アシッド又はウインドウペインズ （pyramid acid or window panes）　ゼラチンの板にワッフル状の刻みが入れてあり、その刻みの一つ一つを矧がすと、それぞれが小さなピラミッド状（四角錐）になるもので、青、黄、赤、灰色など様々に着色されています。これらのピラミッドは咀嚼したり嚥下したりする目的で密売されています。



薬物データベース

向精神薬およびその他の薬物について

[ピー・シー・ピー(PCP)=フェンサイクリディン(phencyclidine)の詳細]

■通称

アンデバ(andeba)、エンジェル・ダスト(angel dust)、エンジェル・ヘアー(angel hair)、アニマル・トランキライザー(animal tranquilizer)、シー・ジェイ(CJ)、キャディラック(cadillac)、クリスタル(crystal)、クリスタルジョインツ(crystaljoints)、サイクロンズ(cyclones)、ディー・オウ・エイ(DOA=dead-on-arrival。"DOA"とは、「到着時死亡」ということを意味する略語で、患者や怪我人等が病院等へ運ばれてきたときに、既に死亡していた、ということを意味する言葉。ここでは、それほど強力で危険なクスリといった俗語)ダスト(dust)、エレファント・トランキライザー(elephant tranquilazer)、グーン(goon)、ホッグ(hog)、ホース・トランキライザー(horse tranquilizer)、ケイ・ジェイ(KJ)、キラー・ウィード(killer weed)又はワック(whack)(この二つは大麻との混合物)、ミスト(mist)、ピース・ピル(peace pill)、ピッグ・トランキライザー(pig tranquilizer)、ロケット・フューエル(rocket fuel)、スカッフル(scuffle。スカッフルとは「取っ組み合いの喧嘩」で、このクスリの性質が判ります)、ソウマ(soma)、スーパーグラス(supergrass)、スーパーウィード(superweed)、サーファー(surfer)、シンセティック・マリファナ(siynthetic marijuana。シンセティックとは合成されたという意味)、ウィード(weed)。

■PCP は、街で取引されているクスリの中で、その作用を予測することが非常に困難なものの一つです。有頂天な酩酊状態から、陰鬱なせん妄(delirium。幻視など一時的な思考の錯乱で、うわごとを言ったりする)の発作に至るまで、その作用の幅は非常に広くなっています。使用者は、第一段階では、自分の肉体的な変化が生じているとか、自分が自分の体から離脱してゆく感じや「離人現象」(自分のしていることを外部から自分で注視している感じ)を伴って、自分の体がどんどん小さくなってゆくように感じたり、更には無重力状態にあるように感じたり、自分の体から抜け出して行くような感覚を味わったりします。

第二段階では、幻視や幻聴などを含む知覚的な歪みが発生し、正確な時間や空間の認識が不可能になります。こうした段階に入る頃には、使用者は非常に多弁になります。第三段階では感覚麻痺(アパシー、apathy)、無関心(indifference、ヒステリー患者に見られるもので、自分の状態や症状に満足する態度)、精神錯乱(estrangement)を待ちます。薬物による酩酊状態が去ると抑鬱と偏執病の人格障害

を示します。こうした最終段階に入りますと、虚しさと絶望感のみに支配され、それが昂じてさし迫った死だけを見詰めるようになります。

PCP は、概ね 1～6 時間の「トリップ」（クスリが効いている間の精神的な彷徨）をもたらします。正常な状態に戻るまでには 24 時間を必要とします。このクスリの作用を正確に言い表すことは不可能ですが、使用者の言によると、他の如何なる薬物の作用とも全く異なったものだそうです。PCP は所謂「サイケデリック」（催幻覚的薬物全般をいいます）な多くのクスリのなかで、その中心的な位置にあります。クスリの形態は様々ですから、肉眼で識別することは不可能です。本来は白色結晶性粉末であるこの薬ですが、LSD を中心に他の色々な薬物と混ぜてゼラチン・カプセルに入れた状態にしたり、喫煙できるような状態の物に浸したり振り掛けたりして一層強力な幻覚をもたらします。（例えば、タバコに振り掛けた物は、「シャーマン」[sharman]、大麻に浸した物は「ワック」[whack]又は「ボウツ」[boats]と呼ばれますが、これらの他にも、パセリやミントなどに浸したり振り掛けたりします。）

PCP は我が国では「麻薬」に指定されています。

薬物データベース

向精神薬およびその他の薬物について

[　メスカリン（mescaline）の詳細　]

■通称

アンハロニウム（anhalonium beans）、ボタンズ（buttons）、カクタス（cactus）、ヒコリ（hikori）、フアタロー（huataro）、ミースィー（mese）、メスカル（mescal）、メスカル・ボタン（mescal buttons）、ムーン・プランツ（moon plants）、スィーニ（seni）、ワコウィー（wakowi）。

■メスカリンは「ペヨーテ」（サボテンの一種）の幻覚をもたらす主成分です。この植物そのものからも摂取することができる他、味も外観もまるで茶色い土のような有機体メスカリンをこの植物から取り出すことも可能です。合成の硫酸メスカリンは白色、針状結晶ですが味はほぼ同様です。末端の密売で、合成のメスカリンの本物に出会うのは極稀です。通常メスカリンとして売買されている物の殆どは、PCP（フェンサイクリジン）、LSD（エルエスディー）、PCP と LSD の混合物、アンフェタミン類、STP（メトキシメチルアンフェタミンですが、「馬力」を上げることができるということで、1970 年代に流行っていたガソリンの添加剤である「エスティーピー」（商品名 STP）の名を借りてこう

呼ぶようになりました）、ベラドンナ・アルカロイド（ベラドンナはヨーロッパ及びアジア原産の植物で、スコポラミン、アトロピン、エル・ヒヨスチアミンなどのアルカロイドを含む）、又は不手際な合成から生じた諸々の夾雑物を含む物などです。

■メスカリンが注射されることは稀で、カプセルにすることは可能ですが、天然のペヨーテ・サボテンをそのまま口に含み、柔らかくなるのを待ってから、咀嚼しながら、或いはそのままで、嚥下して摂取します。苦味は避けがたいもので、摂取後、嘔吐することがあります。

メスカリンの「トリップ」（トリップとは「旅をする」ことですが、ここでは、薬理作用によって、精神的に尋常でない状態が作られ、その異常な状態の中に精神的に「彷徨う」（トリップする）ことを言います。）も、LSD の場合と同様で、その時の心の状態（これをセット[set]といいます）や環境条件（これをセッティング[setting]と言います）に大きく左右されます。つまり、ある場合にはまるで霧の中を舞うような幻覚的感覚を味わうでしょうし、また別の場合には精神分裂病様の傾向を示して、発作的に不機嫌になったり何の理由もなく激昂したり、不安、混乱、抑鬱、しんせん（=震え）、悪心、不眠、食欲不振などが見られることがあります。楽しいという感情と悲しいという感情、うわついた感情と怒りの感情といったように、相反する感情が併存する状態になることも稀ではありません。使用者としては全く脈絡のない感情に支配されて面食らってしまうといったことが起こります。

ご存じのとおり、メスカリンはメスカレロ・アパッチ（インディアン）が儀式の際に用いていたもので、今ではアメリカン・チャーチに属する土着民のみの使用が許されています。

わが国ではメスカリンも「麻薬」に指定されています。

FDA　（Food and Drug Administration）

アメリカ食品医薬品局は、食品や医薬品、さらに化粧品、医療機器、動物薬、玩具など、消費者が通常の生活を行うに当たって接する機会のある製品について、その許可や違反品の取締りなどの行政を専門的に行うアメリカ合衆国の政府機関である。

SAMSHA

The Substance Abuse and Mental Health Services Administration

薬物乱用と精神衛生の公的医療管理　　物質濫用と精神的な公共医療の管理

DOT

U.S. **D**epartment **of** **T**ransportation
アメリカ　連邦政府　運輸省

MRO